

書評・Book Review

魚類学雑誌
49(1): 59-61

「世界の淡水魚の自然史」という本の1つの理想形

Freshwater Fish Distribution. —T. M. Berra. 2001. Academic Press, San Diego. xxxviii+604 pp. ISBN0-12-093156-7.

世界の淡水魚の自然史が凝縮された1冊である。著者のTim M. Berraには1981年出版のAn Atlas of Distribution of the Freshwater Fish Families of the Worldという著書があり、本書はその全面改訂版という。しかし、ばらばらとめくっただけで旧著とは別物になっていることがわかる。共通しているのは項目立てが科ごとになっていて、それぞれにその分布域が世界地図上に示された図がついていることぐらいである。各科の解説は旧著よりも大幅に拡充されている。

タイトルはあくまで「分布」となっているが、本文中では分布の記述はともかく、各科の形態と分類、科の内部や近縁な科との類縁関係についての短い総説になっているのが目立つ。また、生理や生態、行動、漁業と利用、希少種の現状などについても、いくつかの代表的な種をピックアップしつつ解説されている。

さらに、旧著では魚のイラストが簡単な輪郭だけの絵だったのに対し、本書では引用による、より細密なイラストが多数掲載されている。イラストを引用した結果、その画質にはばらつきがあるが、多くの科で複数の種のイラストが掲載されていることも相まって、旧著よりよほど科の特徴をイメージしやすい。また単純なことだが、いくつかの種を例に挙げながら、サイズについても記述がある。これも特徴をイメージする助けになる。

淡水魚の多くは海を渡って分布を拡げることができない。その分布域は陸地と水系の成り立ちと変遷を反映し、系統類縁関係と密接に関連しているはずである。また、イントロに記されているように、地球上の水の0.0093%を占めるにすぎない淡水域に魚類全体の種の41% (8275種) がある(ただし、元になる種数の見積もりは新旧いろいろなものの羅列にすぎないので、わかりにくく、またアバウトな目安である)。淡水域の分断による分布域の限定と、淡水域における環境の多様性がいかに生物多様性に寄与していることか、昨今の、外来魚を密放流したり、「善意」でメダカを他地域に放流することが、いかに地球と生命の歴史に対する犯罪行為であることか、これらを考慮すると、淡水魚の自然史を記述する上で「分布」が最重要項目の1つであることがわかる。

したがって、「世界の淡水魚の自然史」という本の1つの理想形をイメージすると、分類と系統、生理生態などのほかに、分布にも重きをおいて解説するという、本書のようなものになるのではないかと。淡水魚の研究者は、研究対象が身近にいるために近視眼的になりがちであるが、淡水魚の多様性の全体像が概観できる本書の一読を勧める。そうは言いつつも、熱帯アジアにいる、レプトセファルスまたはシラウオそっくりのニシシ目 *Sundasalanx* や、同じく「熱帯」アジアにいる「トゲウオ」*Indostomus* の解説など、オタク的興味もまた満足させてくれる。

本書に不満があるとすれば、それは科より上位の分類群につ

いての概説が、とくに項目立てされていないということである。たとえば骨鰓類とは、コイ目とはどんな特徴でくられるか、その下にはどんな目(科)があるのか、といったことは、そのグループで初出の科の解説冒頭で述べられている。本書ははじめから順に読んでいくというより、つまみ食いのような読み方にも向いていそうな印象を与える。私もあちこちつまみ食いしているうちに結局読んでしまったクチである。しかし、このような構成のパターンを知らない、上位分類群の記述を探すのに苦労する。なかでも、真骨魚類の概説はオステオグロッサム類の解説の中ほど(55ページ)にあって、つまみ食いではなかなか見つからない。この書評を読んだあなたは心配いらないが、

(斉藤憲治 Kenji Saitoh: 〒985-0001 塩釜市新浜町3-27-5 東北区水産研究所 e-mail: ksaitoh@affrc.go.jp)

日本産魚類検索 全種の同定 第二版. —中坊徹次(編). 2000. 東海大学出版会, 東京. Lvi+1748 pp. ISBN4-486-01505-3, 28,000円(税別)。

本書は2000年12月20日に出版されたので、書評を書くにはいささか時期を失した感なきにしもあらずだが、重要な出版物なので簡単に紹介したい。本書の初版は1993年に出版され、1995年に初版補訂第2刷が出版された。しかし、最近の魚類分類学の流れは速く、しかも大きな変更が進んでいる。また、日本の魚類についても多数の論文が出版されて多くの初記録種や新種が報告されている。このような状況を考慮して、本書は初版にかなり手を入れた形で出版された。また、初版より約300ページ増えたため、1冊の本には収まらず、2分冊として出版された。

本書の全体的枠組みは初版と同じであるが、「魚類概説」の「分類学」や「タイプ」、「魚類の分類体系」、そして本体の「科の検索」、「種の検索」及び末尾にある「分類学的付記と文献」などが大幅に改訂されている。「魚類の分類体系」は7ページあり、初版発行以来の系統分類学の流れを簡潔に紹介し、編者の見解も適宜示されている。ここに述べられた分類体系が本書の内容に取り入れられ、魚類の各グループのまとまりや配列が初版とはかなり異なる結果となっている。本書の分類体系が最良のものであるという保証は編者や著者を含めて誰にもできないが、このような試みが続くことは魚類の系統分類を進展させることにつながるであろう。今後も魚類の系統分類は変貌を続けることになるであろうが、本書は魚類が脊椎動物の中でどのような位置にあるか、また、魚類の全体像を把握するために役立つに違いない。

「科の検索」という試みはまことに大胆であるが、編者は初版のときの欠点を改訂し使いやすい「科の検索」を目指し、ほぼそれに成功したと言えるだろう。難問に挑んだ編者の熱意が伝わってくる。初版においてレプトケパルス型幼生のみが検索のキーになっていたグループでは、喉板が新たに形質として取り上げられており、苦心の跡がうかがわれる。また、本書の真骨頂

ともいえる「種の検索」は大幅に改められている。検索を使いやすいものにするため、未発表のデータが使われているグループもあり、編者をはじめとして著者達の意気込みを感じる。したがって、収録された情報は全体として適切であり、各グループの分類学的な最新情報が掲載されていると言えよう。末尾にある「分類学的付記と文献」の部分では、各グループの著者名が示され（初版では示されていない）、便利になった。しかし、グループによっては最近の世界の分類情報を反映していないものも散見される。魚類分類学の進展が速く、科や属の再検討が盛んに行われているためであるが、大きな本であるから影響力も大きい。英語版が近い将来に出版されると聞いているので、このような点が改められることを期待したい。

このように第二版は初版と比較すると工夫が凝らされ、情報量も多く、全体として非常に優れた出版物である。しかし、初版から7年が経過したにもかかわらず、本書の著者達が研究中のグループには未記載種や学名が定まっていない種が依然として残されている。初版の書評に記したとおり、著者達の責任は軽いとは言えないであろう。大きな仕事を成し遂げた著者達が、個々の論文でこれらの問題を早期に解決することを期待したい。

(松浦啓一 Keiichi Matsuura : 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: matsuura@kahaku.go.jp)

漁師の危機は琵琶湖の悲鳴

わたし琵琶湖の漁師です。—戸田直弘。2002。光文社(新書)、東京。204 pp。ISBN4-334-03125-0。680円(税別)。

仕事するなら自分のためにやりたいし、自分の好きなことをやりたい。それで、人様のお役に立てたらいいことない。カッコよすぎるかもしれませんが、私はそういう仕事をしたかった。だから、好きな琵琶湖の景色を見ながら漁師をやって、美味しい魚をつかんで、みんなに「美味しいわ」という食べてもらう。そんな仕事ができる自分の人生を、「なかなかええ人生やで」とも思ってますねん。一著者の戸田氏は、自分の職業を自信を持ってこう位置づける。漁師を、同じ魚を相手にする研究者と読み替えて、どれだけの研究者が太刀打ちできるか。一章から二章にかけては琵琶湖の漁法について、三章は一人前の漁師になるまでの道のりを、四章では漁師の生活に壊滅的な打撃を与えているブラックバスとブルーギルの脅威について、五章は漁師ならではの楽しみについて記されている。

琵琶湖の漁法について戸田氏は、魚群探知機の使用も集魚灯も禁止されていて、魚を追い回してつかむ漁はほとんどなく、「エリ漁」や「コイト漁」などに代表される「待ちの漁」であるとし、次にその意味を鋭く洞察する。元金を食いつぶさずに余剰をありがたく分けて頂く「待ちの漁」こそ魚を絶滅させず、漁師も一緒に生かしてもらう知恵。広くて狭い琵琶湖で魚と仲良く暮らしていく知恵なんです。資源の有効な利用の仕方と違いますが、賢明な利用の仕方です。一現在地域で流域で、また地球レベルで生じているさまざまな環境問題・資源の枯渇問題が、全て賢明な利用でなく有効な利用に走ったがゆえに生じていることに異論はあるまい。戸田氏が次に聞いたかったのは「琵琶湖総合開発」また現在国土交通省が音頭をとる「淀川水系流域委員会」の答申が、琵琶湖の賢明な利用をその理念に掲げ、その実効性を発揮できるか否かと想像する。

三章で語られるように、賢明な「待ちの漁法」を習得するには年を要する。オフクロと二人で漁に出るが、「こんなところで、何つかむねん」というやわらかそうでその実きつい「いったいお前は何を考えてんのや! あは」という罵声が浴びせられる。しかし、こうすれば魚が獲れるという正解をオフクロが与えてくれることはなかったという。親父の漁法をオフクロが理解できず、息子に教えられなかったというのではないらしい。魚の成功には一つだけの正解ではなく実は複数の正解があって、その人の個性に沿った解答の中の一つを苦労しながら自ら見つけ出すしかないという、教育?の基本だったようである。これが正しいとすると、親父と息子の漁法を物言わず会得したオフクロさんは、二者とはまた異なった自らの漁法を身につけていたはずである。戸田さんに会う機会があれば、ここのところをたずねてみたい。失敗を重ねながら、一人前の漁師に成長する過程で「失敗」と「成功」の要因群に対する捕らえ方が実に論理的・普遍的であり感心させられる。

初めてブルーギルを見たのが18年前ということがこれは28年前の間違ひではなからうか、ブラックバスはその3~4年後という。その頃私は比叡山麓下坂本に居て、和式の毛ばり釣り「テンカラ」の練習でこのブルーギルとブラックバスを相手に遊んでいた。まさか琵琶湖がこんなことになるとは想像できないで、当時は梅雨時になると、小刻みに波打つ異様な波紋の大編隊が、沖合から大津臨湖実験所の棧橋に向けて押し寄せてきた。確か、ピチャピチャピチャと魚が空気とともに流れ藻を食む音が聞こえていた気がする。琵琶湖と奈良県の一部にのみ分布しているワタカだ。そのワタカが、今や絶滅危惧種になってしまったという。ブラックバスの増加と逆にフナ寿司の材料となるニゴロブナ、ホンモロコなども激減する。これほど劇的な琵琶湖在来種の減少をもたらした主たる原因は、富栄養化・湖岸の開発・藻場帯の喪失や内湖の埋め立てといった要因も影響しているが、大きくはブラックバスとブルーギルの捕食と競争によるものと断言してよい。

南湖のブラックバスが、ザリガニやヤゴを、またブルーギルやブラックバス自体を食べている窮状を察し、身勝手な人間に連れてこられた罪のないブラックバスに、生き物としてまっとうな愛情を戸田氏は感じつつも、持続的な琵琶湖漁業のために泣きながら駆除する。この状況に誰が追い詰めたのか。

40年程前、安曇川河口の溝口で行われた臨湖学校に参加した。水中眼鏡で湖を覗くと、恐ろしいほど遠くの葦帯の隅々まで見通すことができた。琵琶湖博物館の水槽とは比較にならない、アユ・オイカワ・ハス・タナゴが無数に泳いでいる光景が目に見え込んできた。凄いとところだという印象が焼きついている。素足の裏になにやら堅いものがごそごそ感じられる。シジミだ! 翌朝の味噌汁に、足の裏で探りつづけたシジミが現れた。

最も美味しい魚は7~8月のビワマスの刺身だと戸田氏はいう。本当に魚が美味しいのは腹に子を持つまで。子を持つと、どうしても栄養がそっちにいつて、身の旨みが落ちると、まったく同感である。しかし私の舌は、8月のビワマスは身の旨みが既に卵に移動しつつあって、旬は6~7月の一ヶ月先にずれると思う。また氏はホンモロコは産卵期の春が美味しいと判定するが、魚の産卵期と旨みの論旨と矛盾する。私は、ホンモロコの旬は、最も脂の乗る12月だと思う。この2点が同意できない。

日本の在来淡水魚をその対象とする研究者は、フィールドと対象種の危機がここまで逼迫していることを改めて実感し行動

すべきであり、オオクチバスの「すみわけ論」を擁護するバサーは所詮道楽に過ぎない自分たちの行為が、同胞である琵琶湖漁師に何を強ひ続けているのかを正しく知るべきである。もちろんオオクチバス擁護派が逃げ口実に使うように、魚類を始めとした水生動物の減少要因をオオクチバスやブルーギルに全て帰することができないことは自明のこと。琵琶湖を水の詰まった

タンクとしかみなしていない人たちにも、ぜひ手にとって頂きたいお勤めの本である。

(田中哲夫 Tanaka Tetsuo : 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 兵庫県立姫路工業大学/人と自然の博物館 e-mail: f-tanaka@nat-museum.sanda.hyogo.jp)

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
49(1): 61-62

□魚類学

魚の分類の図鑑：世界の魚の種類を考える。—上野輝彌・坂本一男, 1999. 東海大学出版会, 東京, 196 pp. ISBN4-486-01497-9 C1045, 2800円(税別). 魚の分類の図鑑?と聞いて最初は何を今さらと思った。ところが、それは魚類の多様性を理解していない無知のなせるわざであることが後にわかった。実は、魚類全体の多様性を理解するのは容易なことではない。まさかあの分厚い図鑑を持ち歩くわけにもいかないし、普通の図鑑はある特定の地域の魚を扱っているにすぎない。魚類学の教科書もあるけれど、あれは読み物として面白いものではないし、線画から得られるイマジネーションには限界がある。本書は魚類全体の多様性を体系的に理解するためにつくられた本である。比較的新しい分類体系に沿って魚類が高次分類群ごとにまとめられ、豊富な写真とわかりやすい解説がついている。何より特筆すべきは本書が非常にコンパクトなことである。つねに持ち歩いても邪魔にならない。欠点があるとすれば、それは本書が小さいために紛失しやすいことであろうか。現に私の手元から何回も消え去っている。著者の一人である上野輝彌氏は、日本(あるいは世界?)でもおそらく魚類全体の多様性を端から端まで手にとるように理解している唯一の人である。そしてもう一方の著者である坂本一男氏の魚に対する造詣の深さには常に驚かされる。この二人が書いた本の質が悪かろうはずがない。魚類学者が「私の魚」に埋没しないためにも、本書を常に手元におき自己研鑽されることをお勧めする。(宮 正樹)

□魚類行動生態学

魚類の社会行動1。—桑村哲生・狩野賢司(編), 2001. 海游舎, 東京, 209 pp. ISBN4-905930-77-4, 2600円(税別). 既刊の「魚類の繁殖戦略1, 2」の姉妹編として企画された3巻からなるシリーズ本で、本書はその第1巻である。今回の「魚類の社会行動」シリーズでは、魚類の社会行動・社会関係に見られる興味深いトピックスをとりあげ、進化生物学・社会生態学の視点からそれぞれの現象の意義やメカニズムを掘り下げ、詳しく解説することを謳っている。そうした狙いが第1巻で功を奏しているのかどうか気になることである。本書(第1巻)

は、野外調査のデータを基に、「雌雄の協力と対立」をキーワードとする5つのトピックス(5章)で構成されている。第1章、カリブ海にすむブルーヘッド(ペラ科の1種)雄が産卵相手の雌のサイズに対応して放出精子量を調節する現象とその調査方法に関する論述から、第5章での口内保育魚オオスジイシモチにおいて時々起こる保育雄による保護卵の捕食が基本的には保護雄の生存と繁殖のトレードオフによって成り立っている話題まで、一気に読ませる。若手行動生態学徒のフィールドワークを通じた真摯な謎解きへの努力と、それをエンカレッジする編者の温かい姿勢が伝わってくる好書であり、続巻の刊行も待たれるところである。(後藤 晃)

□生態学

Competition. 2nd edition. (Population and Community Biology Series, Volume 26)—P. A. Keddy. 2001. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht. 552 pp. ISBN 0-7923-6064-8. 1989年に出版されたものの全面改訂版である。ページ数も202から倍以上に増え、生態学の主要原理である競争についての詳細な教科書となっている。大変有用な本である。著者はこの第2版において、資源の動態と競争との関係や競争における優劣問題、環境勾配に応じた競争の違い等について重点をおき、新しいモデルの紹介や進化と競争との関係についても多くの紙面を割り当てている。私が学生の頃にはガウゼの競争排除則やロトカーボルテラのモデルなど単純なものしか紹介されていなかったが、今や競争は対象生物、環境、生態系によって多様な問題点を生み出している。初版本に比べて多くの内容を含んでいるが、それだけ複雑にもなっている。私は個人的には競争は2つの側面ですますおもしろくなっていると思う。1点は、個体差をもつ集団と集団をどのように解析するのかということ、もう1点は、群集構造の中で競争がもつ意味をどうとらえるのかということである。本書を読むかぎりでは、これらの点についてはまだ十分に進展していないようであるが、それだけ新しい研究の展開が期待できると考えられる。(片野 修)

□その他

魚介類に寄生する生物。—長澤和也, 2001. 成山堂書店(ハルソーブックス009), 東京, 186 pp. ISBN 4-425-85081-5.